

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0015
東京都東大和市中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-Create, TOHOKU!

2024年(令和6年)11月16日 土曜日

無料

第150号

毎月発行

発行 2024年(令和6年)11月16日 土曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、71歳の新人歴史映像作家兼プロデューサー。3作目の「古代製鉄の埋もれた歴史を発掘した映像」の【奪われた古代鉄王国】の大崎上映会は延期。とはいえ新型コロナ禍を乗り越えて4作目制作に向けて奮闘中。趣味は古代史・縄文文化研究。埋もれた歴史を発掘することと東北から日本を変えることを標榜。



大谷選手、幼少からの夢・・・世界の頂点・ワールドシリーズ優勝おめでとう！

でもあと数か月、大谷選手の活躍が見られない！ だからこの季節に大谷選手のこの一年の活躍を 思い出してその空白を埋めよう！ それにしても大谷翔平はどこまで昇りつめていくの だろうか？ワールドシリーズ10連覇か？

大谷選手、ワールドシリーズ優勝おめでとう！

大谷選手、まずは、小さい頃からの夢だった大リーグでの「ワールドシリーズ優勝」おめでとう！

こんなに早く、目にも止まらぬ速さで、わずか移籍一年目にして早速実現するのはほんとにすごいことだ。選手としての活躍もすごかったが、それ以上にチームを引っ張っていくパワーもつとすごかった。

チーム全体にも、同僚の選手たちにも、ファンにさえも、それが単なる夢ではなく、実現しようと思えば出来るのだと信じさせ、行動に移させるに至ったパワーはほんとにすごい。ほんとうにおめでとうと言いたい。

来春まで続く耐え難く 憂うつな季節が来た

しかし、その「憂」ももう終わってしまった。当新聞にとっても、筆者にとっても、とても憂うつ

で、体調がおかしくなりそうになる季節をまた迎えることになった。

世界に誇れる、東北が産んだ英雄である大谷選手の活躍が来年までリアルタイムで見られないのだ。

生活にポツカリと大穴が開いたような、耐えがたい生活が来春まで続く。

せめて、その穴埋めに、大谷選手のこの一年を振り返ってみようと考えた。

いろんなことが起きた一年だったので、「会えないさびしさ」を多少なりとも慰めてくれることだろう。

大谷選手の今年一年を振り返る

読者のみなさんも、この一年は大谷選手にいろいろなことが起きて、すっかり忘れていたこともあると思う。時系列で逐一出来事を追ってみよう。

＊
昨年の九月には二度目の右ひじの手術をした。

それで、一時は打者としての活躍も心配されたが、

無事打撃に専念できることが決まった。

とはいえ、「右ひじのリハビリ中」であることに変わりはない。

昨年十二月にはエンゼルスからドジャースに移籍した。やきもきしたが、その移籍は大方支持された。

その移籍金は、スポーツ界最高の契約額と騒がれた。十年契約で、七億ドル(円換算で一十億円超)という驚きの契約だった。

今年二月末には「結婚したこと」を発表した。この突然の発表には世界中が驚いたが、日本人との結婚という発表だけで、だれと結婚したのかが分からない。

それで、「本当の嫁さがし」で大騒ぎだった。

三月半ばになってようやく「嫁」が明らかになった。「田中真美子」という元バスケットボール日本実業団の選手だった。またまた大騒ぎ。

続いて、三月二十日に韓国でパドレスとの開幕戦。こうして、新チームにうまく溶け込み、やっと韓国で今シーズンが始まったと思った途端、「あの事件」が起きた。開幕戦の終了後のことだった。

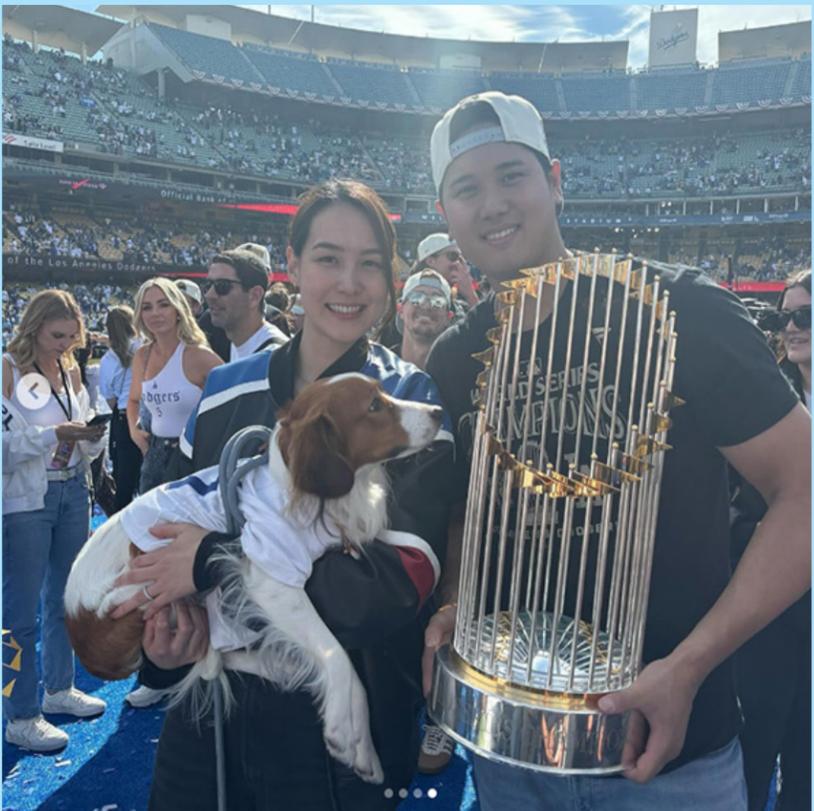
何たることだ！よりよくなってあの人物が・・・しかし、大谷選手はそれにも平然と出場したのだ。並みの精神の持ち主にはとてもできることではない。そうしたスタートを切っ

た今シーズンだった。

しかし、なかなか成績が上がらない。本調子になったのは六月に入ってから。シーズンの半分あたりに来て、打率はリーグトップ、ホームラン数も打点もトップに近づいた。今年には三冠王が狙えるかと思わせる位置まで調子が上がった。

そしてオールスターでは、初ホームラン。これにより、大リーグ史上初めて、勝利投手とホームランを記録した選手となった。

そして、シーズン後半へと突入して行った。結果は、チームはナショナルリーグ西地区での優勝だった。勝率は両リーグを通じてトップだった。大谷選手が大貢献したのは言う



ワールドシリーズ優勝トロフィーと大谷夫妻とデコピン・・・
FULL COUNT 2024.11.02 より



脱臼しても「出たい！」【写真：G102etty Images】より

までもない。
その後、プレーオフに進出し、まずはパドレスとの地区優勝をかけた戦いにも勝利した。

第一戦のスリーランホームランの衝撃は一生忘れないうだろう。ワールドシリーズ優勝をたぐり寄せるホームランだった。

次に、リーグ優勝もして最終的には「ワールドシリーズ」にも勝利をおさめ、念願だったワールドチャンピオンになったというのが、大谷選手この一年だった。

「たくさんの記録と賞」

今シーズンの大谷選手は、他にも記録づくめのシーズンでもあった。
メディアが必死に探し出してきた記録もたくさんあったが、それでもほぼ毎日のように「新記録」が誕生していた。

- ①大リーグ新記録の「五十―五十」達成(ホームラン五十本以上、五十盗塁以上)
- ②ドジャース球団新記録のホームラン五十四本
- ③大リーグ日本人最多打点の百三十打点
- ④大リーグ日本人最多盗塁五十九盗塁
- ⑤大リーグ日本人最多得点百三十四点
- ⑥大リーグ日本人最多通算ホームラン
- ⑦大リーグアジア人最多通算ホームラン
- ⑧打率三割、ホームラン

2024年中に実現した大谷選手の「主な新記録」リスト

- **大リーグ新記録の「50-50」達成**
(ホームラン 50本以上、50盗塁以上)
- **ドジャース球団新記録のホームラン54本**
- **大リーグ日本人最多打点の130打点**
- **大リーグ日本人最多盗塁59盗塁**
- **大リーグ日本人最多得点134点**
- **大リーグ日本人最多通算ホームラン**
- **大リーグアジア人最多通算ホームラン**
- **打率3割、ホームラン30本、30盗塁のトリプルスリーの日本人初達成**

三十本、三十盗塁のトリプルスリーの日本人初達成

他にもあったような気がするが、すべてを記載するのは無理のようである。

小さい頃からの夢のワールドシリーズで世界の頂点のチームに!

こうした記録づくめもすごいが、何といても、移籍の一年目での「頂点」達成はさすがすぎる。
高校時代に「人生設計シート」に書いた夢が実現したのだ。

これからMVPの最終選考もあるようだが、当新聞も、筆者も、両リーグを通

じてのMVPにいち早く決定したいと思う。
それに、今シーズンは「投げない」からという理由だろうが、「盗塁」にも努力した。そして、見事に大リーグ新記録も作った。もう破られることはないだろう。しかし、最後に落とし穴が待っていた。肩の脱臼。

「9 MORE TIMES (あと9回やろう)」

ドジャースとの十年契約の一年目で頂点に駆け上がった。来季は投手としての復活も待っている。
大谷選手は本気で十連覇を狙っているのだから、彼は軽いジョークは言わない。来シーズンが待ち遠しい。二連覇が見られる。

ほんとうに「十連覇」を狙うのか?

大谷選手が、今年四度目のチャンパンファイトで、編成トップのフリードマン編成本部長に美酒を浴びせて、次のように声をかけたというのだ。

「9 MORE TIMES (あと9回やろう)」
ドジャースとの十年契約の一年目で頂点に駆け上がった。来季は投手としての復活も待っている。
大谷選手は本気で十連覇を狙っているのだから、彼は軽いジョークは言わない。来シーズンが待ち遠しい。二連覇が見られる。



ポストシーズン初戦の3ランホームランで流れが大きく変わった! NHK NEWS 2024.10.6より



盗塁で脱臼 FNN プライムオンライン 2024.10.27より

台湾半導体の宮城進出ドタキャン劇の【復活話】が出現してきた… 規模と進出予定企業は不明だが、計画復活はほんとうにあるか? 今度ふたたびドタキャンしたら絶対に許されないよ!



工場予定地だった宮城県大衡村は天国から地獄、そして再びの天国になるか?(TBS NEWS DIG 2024.9.30より)

いよいよ東北にも先端半導体の生産工場が出来ると思われていたところに、前号でお知らせしたように、「青天のへきれき」ともいうべきドタキャン劇が発生した。
台湾半導体受託製造大手の力晶積成電子製造(PSMC)の宮城進出が急遽取りやめとなったのだ。当新聞も非常にがっかりした。

宮城県での半導体工場建設計画を維持する方針をあらためて示したという。
新たな提携先について「候補はある」と強調し、「一番良いところと組み、できれば宮城のあの土地でやりたい」と述べ、予定していた宮城県大衡村で工場の建設を目指す考えを強調したという。
喜ばせておいて、がっかりさせて、再び期待を抱かせたが、今度こそはドタキャンは絶対に許されない。当新聞も、今後の動向を注視して行こうと思う。

2024年衆議院選の各地方比例ブロックを比較してみる 「東北」と「中国地方」と「南関東(千葉・神奈川・山梨)」を比較 明治時代からの長州閥の影響は今現在も存在するのか?

東北の比例代表

党派 / 獲得議席(女性) / 得票 / 得票率
自民 5 (1) 1,188,975 31.4%
立民 4 (0) 993,007 26.3%
国民 1 (0) 396,991 10.5%
公明 1 (0) 367,341 9.7%
れいわ 1 (1) 271,855 7.2%
共産 0 (0) 223,409 5.9%
維新 0 (0) 165,697 4.4%
参政 0 (0) 94,354 2.5%
社民 0 (0) 79,484 2.1%

*データはNHKより、編集は当新聞

中国地方の比例代表

党派 / 獲得議席(女性) / 得票 / 得票率
自民 5 (0) 1,056,320 35.9%
立民 3 (0) 572,598 19.5%
国民 1 (0) 307,681 10.5%
公明 1 (0) 354,291 12.0%
れいわ 0 (0) 173,622 5.9%
共産 0 (0) 149,218 5.1%
維新 0 (0) 187,517 6.4%
参政 0 (0) 88,358 3.0%
社民 0 (0) 53,620 1.8%

*データはNHKより、編集は当新聞

南関東の比例代表

党派 / 獲得議席(女性) / 得票 / 得票率
自民 7 (1) 1,822,230 25.4%
立民 6 (1) 1,700,535 23.7%
国民 3 (1) 907,123 12.6%
公明 2 (1) 729,980 10.2%
れいわ 1 (0) 472,519 6.6%
共産 1 (0) 437,724 6.1%
維新 2 (0) 536,161 7.5%
参政 1 (0) 267,145 3.7%
社民 0 (0) 109,959 1.5%
保守 0 (0) 191,169 2.7%

*データはNHKより、編集は当新聞

各比例ブロックの選挙人登録者数と輩出議員数

東北ブロック	選挙人登録者数 7,148,196人
	輩出議員数 12人(595,683人)
中国地方ブロック	選挙人登録者数 5,915,474人
	輩出議員数 10人(591,547人)
南関東ブロック	選挙人登録者数 13,677,814人
	輩出議員数 23人(594,687人)

*基礎データは読売新聞オンラインより、編集は当新聞

一票格差問題

NHKのまとめによりますと衆議院の289の小選挙区のうち、▽有権者が最も多いのは北海道3区の46万1457人▽最も少ないのは鳥取1区の22万4060人で1票の格差は、最大で2.06倍となりました。今回の選挙では、1票の格差を是正するため小選挙区の数に「10増10減」するなど区割りの見直しが行われ、1票の格差は前回・3年前の選挙の2.09倍から縮小したものの前回に続いて、2倍を超えています。(NHK記事より拝借)

先日行われた衆議院議員選挙の結果は周知のように、自公政権は惨敗し、過半数を割った。対するに、国民民主党が解散前の四倍の議席を獲得して、政治のキャスティングボードを握ったと大騒ぎ。立憲民主党も大幅に議席を伸ばした。

日本維新の会は関西圏を除いて、惨敗といってよい結果となった。過半数割れの政権党は、これまでのような政権運営は非常にむずかしくなっており、野党の主張も取り入れていかないとすぐに行き詰まるだろう。国民にとってはある意味で、良い傾向

かもしれない。こうした結果を踏まえて、東北は今回の選挙にどのような臨んだのか、どのような役割を果たしたのかを検証してみたいと考えた。また、従来から西日本、特に山口県(旧長州藩)を含めた中国地方と比較してみたらどうなるかも考えてみる

ことにした。比較にあたっては、個々の政治家の当落は棚上げして、比例ブロックで比較することにした。

ク(千葉・神奈川・山梨も含めて比較するとどうなるかを見た。

れだが、ほぼ50%に近い。ちなみに「南関東ブロック」は、35.6%で、大幅な過半数割れとなった。この結果を見る限りでは、「南関東ブロック」では自公政権は「完敗」であり、表には出ていないが、東京はさらに「完敗割合」が強い。

ここを見る限りでは、「東北ブロック」も、自公の過半数割れに「貢献」したといえるのではないのか？

一票格差問題は、個々の小選挙区を取れば、依然として二倍を超えている。何とかしなければならぬ。他方、取り上げた三つの比例ブロックの選挙人登録数(有権者数)と輩出議員の割合は変わらない。一人の議員を輩出する有権者数はほぼ同じで、五十九万人超となっている。

*かつては「保守王国」といわれた東北も様変わりしてきたといえるのではないのか。

*かつては「保守王国」といわれた東北も様変わりしてきたといえるのではないのか。

「観光レジリエンス」開催の意義

初のサミットが仙台で開催されたメリット

去る一月九日から一日の三日間、仙台市内で、初めての「観光レジリエンスサミット」が開催された。これは、観光庁が国連の専門機関である世界観光機関と連携して開催する閣僚級の国際会議で、地震や風水害等の自然災害やコロナ等の危機に対する観光分野の強靱性(レジリエンス)をテーマに議論が行われた。観光庁のサイトによると、我が国が蓄積してきた観光レジリエンスに関する経験を各国・地域と共有し、取り組むべき政策を国際会議等を通じて日本主導で世界に発信していくことが謳われ、その会場として東日本大震災からの復興に取り組んできた仙台市に白羽の矢が立つたようである。

観光は、自然災害や一般のコロナ禍のような事態の影響を直接受ける。東北について言えば、一三年前の東日本大震災で広範な地域に深刻なダメージが生じたことに加えて福島第一原発事故の影響もあって観光客数が大幅に減少した。そこから関係者の懸命の努力があつて観光客数が回復してきたところにコロナ禍が発生し、またもや観光客数が落ち込んだ。こうした状況を鑑みても、観光分野には自然災害やコロナ禍のようなパンデミックに対する脆弱性があるように見える。そのことを踏まえて、まさに観光分野のレジリエンス(「レジリエンス」は「回復力」や「復元力」、あるいは「再起力」などと訳され、「脆弱さ」の対義語である)について議論することには大いに意義がある。

サミットには、アジア・太平洋地域から九カ国の観光関連の閣僚と世界観光機関を始めとする国際機関の関係者が参加し、閣連シンポジウムや二国間会談、仙台市主催の歓迎レセプション、閣僚級会合が開催され

観光レジリエンスの向上に向けた今後の取組みの方向性をまとめた共同声明「仙台声明」が採択された。二日目の午後から三日目には、仙台市が主催して東北地方各地を訪れる「エクスカーション」を実施して、各国・各機関の参加者に、東北の文化や食、自然などの魅力を体験・体感してもらったことである。この機を捉えて国外の参加者に対して東北の観光プロモーションを行ったことは、今後のインバウンド増加のためにも有意義であつたと思われる。

「仙台声明」の中身

この「仙台声明」、報道では詳細が伝えられておらず、今ひとつ中身が分からなかつたが、一月一三日になつて仮訳が公表された。それを見ると大きく七つからなつていた。

一つ目は、世界の観光セクターのより強靱で持続可能な発展に貢献するべくこのサミットを仙台で開催したということ、仙台が未曾有の震災からの復興に取り組んでいて、かつ第三回国連防災世界会議が開催されて「仙台防災枠組二〇一五―二〇三〇」が採択された地であることが書かれている。

二つ目は、「レジリエンス」がこれまでは自然災害や経済危機などについて語られてきたこと、そしてコロナ禍を経て、観光分野が

外部からの影響に極めて脆弱であることが改めて浮き彫りになったことが書かれている。

三つ目は、将来、観光交流がさらに活発化すると、経済・社会が観光の抱えるリスクの影響を受ける可能性が増幅すると、持続可能性とレジリエンスは相互に関連しており、持続可能な開発目標に向けて取り組んでいる中で「観光レジリエンス」という概念は非常に重要な意味を持つと指摘されている。

四つ目は、閣僚会合で、危機や自然災害の影響の防止・最小化のために事前の備えを行うことが何より重要であることを確認し、発生した危機や自然災害についてはその影響の吸収・適応と変革を通じて回復につつて将来の脅威によりよく備える必要性を認識したとある。その上で、日本と

各国が有する経験・知見を共有するとともに、観光レジリエンス向上に向けた取り組みの方向性をとりまとめたこと、この声明の全体像が語られている。

ここまでがいわば前段で、これ以降に具体的な取り組みの方向性がまとめられている。五つ目は、危機や自然災害の影響を防止・最小化するための取り組みとして、

①各地域の地理的状況や観光産業の特徴を踏まえ、それぞれの地域が直面し得るリスクを把握・評価し、

観光分野に活用する。

②脅威に直面した際に有効に機能する連携体制を構築するために、事前に必要な関係者を特定し、役割分担を明確化する。

③観光客、観光事業者、地域住民等に向けて事前リスクを周知するとともに、レポートイングリインを確立し、危機や自然災害の発生時には正確かつ迅速に情報を収集・発信するとともに、発生後には事実と異なる情報が拡散することによる観光地への被害を防止・管理する。

④事前に訓練やシミュレーション、個人・組織の危機・自然災害への対応能力の開発を行う。

六つ目として、危機や自然災害の影響を吸収し、適応と変革を通じて回復するために、

①将来の危機や自然災害によりよく対応するために、過去の教訓を新たな観光戦略へ活用する。

②観光関連事業の継続・再開と観光地の人的資源確保のために、官民の連携を強化する。

③観光需要の回復・創出の過程において、地域一体となつて各地域の将来像に沿つた観光商品の開発・振興する。

の三点が挙げられている。そして、七つ目として、これらの議論は、観光セクターのみに焦点を当てていては実現できないとして、世

界・国・地方・民間の各主体が多様な関係者と連携・協力しながら、観光レジリエンスを追求することが謳われている。

「仙台声明」を踏まえたアクション

今回の「仙台声明」、こうして見てみると、実に当を得た内容であると言える。今後の観光にとって必要な取り組みが過不足なく盛り込まれている印象である。ここに盛り込まれた内容が、絵に描いた餅にならないようにそれぞれの地域で着実に取り組んでいく必要がある。

「仙台声明」の中で触れられた「持続可能性」と「レジリエンス」の関連で言えば、オランダの国際認証団体グリーン・デスティネーションズが毎年認証する「世界の持続可能な観光地TOP100選」が注目される。

東北ではこれまで岩手県釜石市や宮城県東松島市が認証されているが、今年にはさら

に山形県鶴岡市手向(とうげ)地区と、岩手県遠野市が認証された。こうした認証を通じて、地域の持続可能性の担保を図ると共に、その地域のインバウンドにつながる国際的な認知を促進することも期待される。

一方、観光庁は「地方における高付加価値なインバウンド観光地づくりモデル観光地」として、国内の一四地域を選出している。こちらは、東北は先に「八幡平

及び周辺地域エリア」が選出されており、加えて今年「山形エリア」が選出された。「山形エリア」の選出理由として「雄大な自然と山岳信仰に由来する固有の精神文化」が挙げられ、こちらも出羽三山の存在が大きいことが分かる。

こうして見ると、今後の観光については、インバウンドの増加を見越しつつ、地域の持続可能性と自然災害などからのレジリエンス、そして他の地域とは異なる個性、付加価値をいかに創出するかが重要テーマとなることが分かる。

とりわけ、東北については、白神山、北東北の縄文遺跡群、平泉の浄土を表す建築・庭園・遺跡群が世界遺産に登録されており、縄文時代から脈々と続く豊かな自然とその自然に立脚した独自の文化がある。その魅力を一体的に情報発信しつつ、その自然が一三年前の震災のように災害として牙を剥くことも数多くあつたことを踏まえて、まさにそこからのレジリエンスを古来積み重ねてきた地域であることも合わせて声を大にして発信していくことが必要である。

今回のサミットは観光分野のレジリエンスを高めることが目的の「観光レジリエンスサミット」だったが、

度重なる自然災害や戦乱に打ちのめされ、その度々からレズリエンスを發揮して立ち上がってきたこの

東北という地域は、まさにそのレジリエンスを最大の観光資源とする「レジリエンス観光」をこれからの観光の大きな旗印として、困難に屈することなく、何度でも立ち上がるそうした人の素晴らしさを伝えるような観光の方向性を検討すべきであろうと考える。

その意味では、当時から相次いだであろう自然災害にも関わらず、自然を敵視することなく共存を選択した縄文文化、戦乱で多くの人が犠牲になつたにも関わらず、この世にこそ浄土があることを示そうとした平泉文化、震災の記憶を風化させることなく次の世代の人や他の地域の人に伝えようとした震災遺構などは、「レジリエンス観光」の核となり得る。

国土交通省東北運輸局の発表によれば、今年一月から七月までの時点で、東北六県の宿泊者数は、日本人については依然コロナ禍前の水準には戻っていないが、一方で外国人については既に過去最多だった二〇一九年の宿泊者数のおよそ二六パーセント増となつており、過去最多を更新するのはほぼ間違いない。今回のサミットの「仙台声明」にも盛り込まれた災害発生時の観光客への対応もすっかり進めつつ、東北としては海外から東北を選んで訪れた人たちに、人の「レジリエンス」の素晴らしさをしっかり伝えていきたいものである。

執筆者紹介

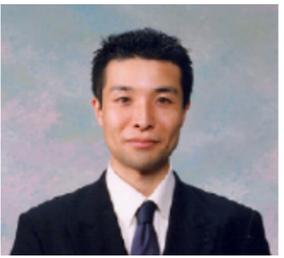
大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagma5/



Facebook
https://www.facebook.com/kouchi.ohtomo

Face book
https://www.facebook.com/kouchi.ohtomo

失われては現れ、また広がる 東北言葉その先の景色の事

郷(山形県庄内地方)の父が世を去り、三年が過ぎた。私が二〇代の頃は家業後継問題で衝突したりなど穏やかならぬ事少なくなかった父子関係ではあったが

数少ない共通の趣味であるテレビでの映画鑑賞において父の反応を見たり短い感想を言い合ったりするのは今考えると内心大きな楽しみで、今もよく思い出すものである。父の存在をとりわけ強く印象づけるのは、その口より繰り出される地元言葉「庄内弁」であった。

当然の事のようにだが、私の母は東京出身(母方の祖父母は庄内人)で子供らはまず母の東京言葉に親しんだ事も、父の庄内弁は



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始め東北好きである。

むしろ一時家内で孤立していた印象があるのである。

父は私や親族が遠方より帰省してくると、必ず一言「ごころ」と言ってお出迎えた。「ご苦労様」という長旅を労う意味だが、これを標準語で「ご苦労」と言ってしまうと、ぶつきらぼうな中にある絶妙な暖かみが消えてしまい、また発している人物が全く別人のようになってしまふのだから、方言とは不思議なものだ。

無論の事だが、これからの世代にはおそらく父のような庄内言葉の話者はそうそう現れないだろうし、父のような庄内人・東北人はおそらく今日も一人また一人と永遠に失われてゆくのである。しかし、東北の言葉と、それを話す東北人は本当になくなってしまうのだろうか?本稿では、大多数の日本人の例に洩れず変貌してゆく東北人と、その内側に形を変えて存在し続ける民族の言葉、その今と未来を見つめてみたい。

※

私の一族に関して、言葉―方言を巡り、ずっと不思議に思っていた事がある。

父の唯一人の弟―即ち私の叔父は庄内の高校を卒業後、もう五〇年以上上東京と神奈川で生活していながら地元の方言が全く抜けてい

ない。写真撮影関連の仕事で日々接客もするはずだが独特の抑揚などは隠していないという事で、これはある意味凄い事だと思ふ。

一方、私の兄は大学時代を京都で、その後四〇年近くを北海道の札幌で暮らしているが、庄内言葉を話す相手との会話においても方言は全く出てこず、完全な標準語である。弟の私ほどいうと、こちらも幼少から沁みついた標準語に加え十数年の東京暮らし、その後東北回帰とは言えど大都市仙台でのこれまた十数年であるが、父を始め地元民との会話では庄内言葉に戻るなど使い分け、また咄嗟の際には「あいやいや!」「なんだもんだや!」(ともに苛立ちの表現)、「かー!」(呆れた時に出る嘆息の表現)、「などの「独白方言」と、勝手に命名)が出てしまうものである。

叔父が推測するには、高学歴の人ほど、地元の言葉を話さなくなる―あるいは話せなくなるのではないかと、確かに叔父も私も大学には行っていないが周囲の大卒の面々がことごとく方言を口にしないかと言えどそんな事はない。しかしながら考えてみると、国立大学教員を務める兄を始め国立大学出身の知人友人はほぼ全て方言を口にすることを聞いた事がないのであった―対して、仙台ならば東北学院を代表とする私立大学の知人も多いが

彼らは逆に方言を隠さず、むしろ盛んに活用して会話の潤滑油にすらしているようなのである。

一体、この違いは何なのだろうか?原因はいくつか考えられる。まず、日常的に会話する相手を含めた言語環境である。そして「キャラクター」だ―その人個々の持つキャラクターと、その人が演じようとするキャラクターの存在である。例えば(あくまでたまたま私の知人がそうかも知れないが)東北学院出身の人の多くは、個人飲食店経営者や画家など、決して凡人には容易ならざる職業を開拓しながらも、かなり濃密な「市井」の中におり、相手にし日々会話する顧客も街なかの様々なタイプの人々だという事である。対して、学歴としては国立大学や一部難関と言われる私立大学の出身者の多くは研究機関や公的機関など高度な頭脳労働を要する環境へ身を置き、関連業者との、その専門分野関連の伝達に必要ない会話が多くなる為、必然的に方言を使用する場面が少なくなる。加えて、

通常人間は自分がどのような職務環境にいるかで、自分のキャラクターを自ら決定し「演じて」いくものであると思われる、それに応じて方言を使っていくか否かを無意識的にも決定していく―程度の差こそあれおそらく全世界共通の「知的な私には方言は似合わない」と判断させてしまう何か―つまり知的なるもののイメージと方言を取り巻くイメージの間の溝の深さが、方言を衰退させる一因の一つと言えのかもしれない。

福島の街はホワイトカラー(スーツの白い襟を示し「オフィスワークなど頭脳労働のイメージ」とブルーカラー(作業着の青い襟を示し、「工事・運送など肉体労働のイメージ)」が混在しているが、仙台は中心街がホワイトばかりで、ブルーが東側に追いやられている―のが気になるという。そう言えば、旧城下である都心よりも郊外の工場や倉庫が林立する区域の方が、方言で話す人の割合が多いような気がする。・そう考えると、大都市化が知的階層のイメージを強化して、都心の人々を方言から遠ざけているとすれば彼らの知的自尊心を打破すべく、仙台の「ホワイト」と「ブルー」をかき混ぜてやらなければならぬのではないか―そんな風にも思うのである。無論、かの井上ひさしによる『吉里吉里国』のように、国家の正式な国語として首脳までが東北言葉を話す世界は幻想であり、おそらく誰もそのような方言世界を必要とするまい。方言を話さねば東北人ではない、などと言う者は勿論、逆に話す東北人は恥ずかしうでなければならぬとい

う形はもはや無く、失われゆく事を悲しむ―というような段階はもしかしたらとつと過ぎて我々は新たな「東北語」の時代に入っているのかも知れないのだ。

近年、私が日頃鑑賞する映像作品などの中で、所謂「中日本」(関西と関東の間。およそその関ヶ原周辺より東の北陸から信州、そして岐阜・愛知・静岡に渡る東海地方を含む)の方言を耳にする事が多い気がしている。かなりザックリした区分で、勿論東北のように統一感のある一地域ではないが、共通点がない訳ではない。それは、「方言にマイナスイメージがある」という事だ。

よく、関西や九州の人間は方言を首都圏にいても隠さず堂々と話す、というのかと云って己の方言を恥ずかしいと思うのは東北人だけではない―何と、東海より東は基本的に方言をネガティブに捉えているというのである。北陸や名古屋、静岡、山梨では「自分たちの訛りは汚い」などと言いや外にも同様に言葉のコンプレックスを持つ東北よりその方言の全国への認知度は低く、却ってベールに包まれている印象すらある。

社会言語学の研究分野の一つに、『言語景観』があるという。これは「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」と定義され、この「言語」を「方

言」に特化して「生活語としての全国的な衰退を見せる一方で方言看板、方言キヤッチコピー、方言グッズなど様々な活用の事例が出現してきた」近年の現象を方言景観の増加傾向として捉える研究もある。庄内の道路上で見かける「よぐぎたの○○さ」といった看板や、仙台ならば以前拙稿でも紹介したアイドルグループ『いぎなり東北産』などが当てはまるだろう。

近年、映像作品とりわけ地方を舞台とするアニメーション作品がもたらす地域への影響、所謂、「聖地巡礼」に代表される経済効果の大きさが広く認知されてきて、今や有名無名関わらず全国各地に「アニメの舞台」なる地が存在するようである。その中で中日本を舞台にした有名なところで、キャンペーンの火付け役としても知られる山梨・静岡舞台の『ゆるキャン△』、今年口コミで話題となった愛知県豊橋市が強力にバックアップする『負けヒロインが多すぎる!』などがあり、これらの特徴としては、登場人物たちのセリフにはほとんど方言が聞かれないが、時折言葉の端々に「〜ずら(甲州弁)」「〜だら」「じゃんねー(三河弁)」という、地域独特の言い回しが挟み込まれているという点が挙げられるようか。これは全国向けにかみも絶妙に取り入れると

いう制作の意図もあるが、それ以上に地域がもはや東京志向であろうと世が東京中心だろうと関係ない、標準語は紛れもない自分たちの言葉であり、もはや張り合うつもりもないがかと云ってそればかりでもない―という、地域のリアルな表現でもあるという気がするの

である。

仙台都心での会話においても、他地域にはわからない単語や言い回しは稀少なからず、独特のイントネーションや「〜ださ(だよ)」や「んだから(同意の表現)」など時たま地域独自の言葉の端々が顔を出す。世代が変わり多くが失われても、残るべくして残る部分がある―これが、東海以東の近年の方言景観というもののなのだろうか。

方言とは、失われてゆくばかりではなく、常に生まれてくるものかも知れない―東北における方言景観に見る「東北の共通語」という側面が私に想像させる。この秋訪れた盛岡駅舎内のコインロッカーに岩手の文化や方言がイラストや大文字のコピーで扉一面に貼りだされていたのだが、岩手言葉として表示されている中で、『〜だば(それでは)』『〜ごしやぐ(叱る)』『〜がおる(弱



JR盛岡駅内・印象的なコインロッカー

最近、山形県西川町でAIの社会実装事業を手掛ける企業が、方言を理解したAIが話し相手になり健康体操を促すという健康増進アプリを開発したという。これは逆に徹底した方言で話すAIが広まれば、英会話のようにある意味否応なく、されど楽しみつつ方言を学ぶ事ができ、民族の言語を思いがけぬ復活への道へ誘わぬとも限らない―そんな妄想をも抱かせる。だがまずは、己の内にある東北の言葉を大切に、いつか父の労いの一言「ごころ」を誰かに投げかけてみたいと思うのである。



溪流と紅葉



マメガキ



ライトアップしし踊り

シリーズ 遠野の自然
「遠野の立冬」
遠野 1000 景より

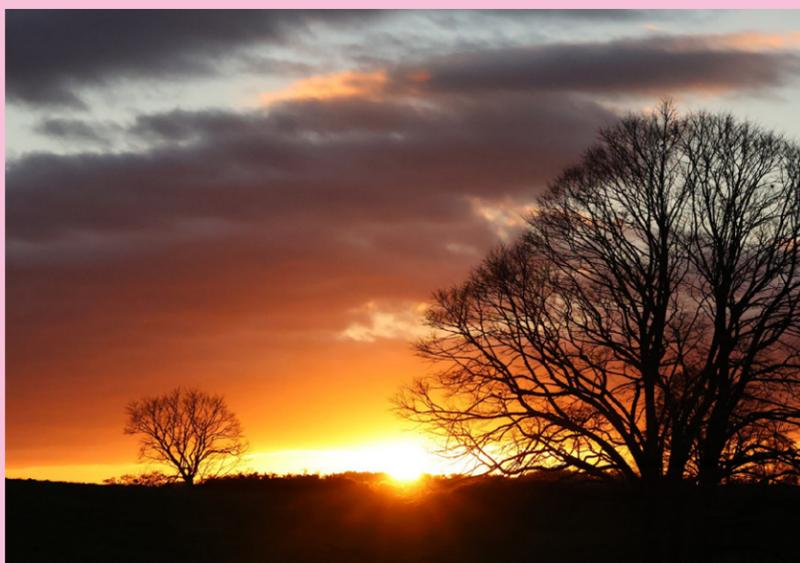
暦上ではすでに立冬に入っているのに聞いて少し驚き、あらためてカレンダーを見ると、今年もあと一月半しかないと感じて急にあわてふためく。雑用に追い回されているうちに、こんな時期になっ



ハナワラビ

てしまったと気づいても時間はもう元には戻らない。今年はずっと気温の変化と季節が連動しなかったため、季節の移り変わりが肌感覚で伝わって来なかった。秋だというのに暖かすぎ

急に例年の気温になると心身ともに落ち着かなくなる。自然から離れば離れるほど、この平衡感覚が乱れる。やはり自然の運行は大事であると痛切に思う。



日没



ムラサキシキブ

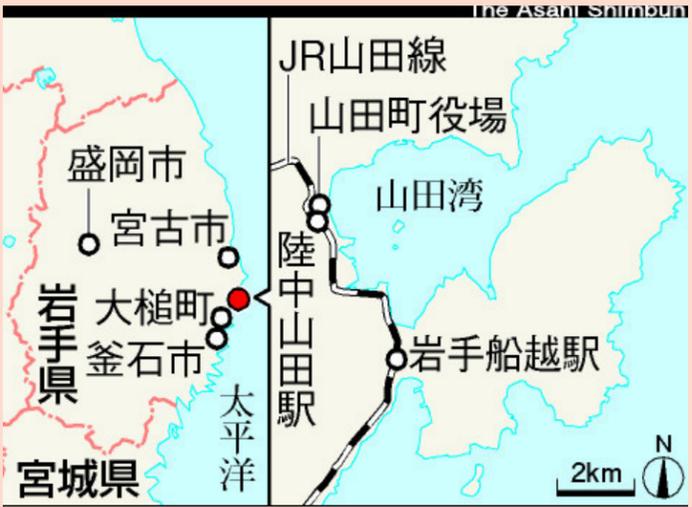


ライトアップしし踊り



溪流と紅葉

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑭ 震災1年半後の「山田町」 東日本大震災の傷跡が生々しく残る釜石沿岸部から北上する旅③



山田町簡易地図

大槌町を後にして、さらに北上した。
途中で、海に近い場所に「カキ小屋」の旗を見つけた。ちょうどお腹も空いていたので、立ち寄ってみることにした。
大震災から一年半しか経っていないが、カキの養殖も順調に回復したのかと少し安堵した。
*
いただいたカキはなおさらに美味しかった。
*
さらに北上し、地図上ではとくに山田町に到着したはずなのに、街には人っ子一人いない。
いくら大震災で被災した町とはいえ、まさかそんなことはあるまいと、町中をレンタカーであちこち走り回ったが、それでも見つからない。
*
いったいどうしたことだ、

町民はすべて大震災の影響で町を捨ててどこかへ避難してしまっただかと思えるも少し浮かんたところで車を止めて、考え込んでしまった。
*
しばらくすると、岸壁の方に向かって人が歩いてるのが見えた。
山田町で初めて見る人だから、どこへ行くのか、後をつけてみようかと車を徐行させた。
*
そうすると突然、岸壁に隣接する倉庫のような建物内にたくさん集まっている祭りの準備をしているではないか。遠くからは、壁にさえぎられて、まったく見えなかったのだ。
人っ子一人いない風景からあまりの変化に驚いて、早速車を降りて、その建物



大型のしゅんせつ船と祭りの好対照の景色

の中を見に行った。
すると、町中の人がこの一か所に集まったかと思えるほどの人がいた。
筆者が町中を車で走り廻っていた時には、すでにそこにたくさん集まっている人を見つけた。後からやって来た人らしい。
*
その人がいなければ、この大集団とも、祭りとも出会わずに退散していたかもしれない。まことにラッキーだった。
*
祭りは、厳かな「神事」から始まった。
倉庫内に鎮座した神輿は大きくて、まことに華やかで、重厚だった。
この豪華で大きな神輿に、海で生きる人々の心意気を感じた。
*
祭りが始まると、一気に「会場」が盛り上がる。威勢の良い掛け声が倉庫内に充満して「爆発」した。神輿の練り歩きもあり、鹿踊りもあり、虎舞もあった。踊り手はほとんどが若い人だった。
*
そこで、少し前に聞いた話を思い出した。

ある郷土芸能関係者の友人が、大震災後、東京から岩手方面に向かう夜行バスに乗っていた。
*
そこには、いかにもヤンチャそうな若者がたくさん乗っていた。
友人は、被災地で行われる郷土芸能祭りを見学するため、夜行バスから、ローカルなバス路線に乗り換えたが、そこでもまた、いかにもヤンチャそうな若者たちと同乗することになった。



突如人だかり出現



立派な神輿

きつと被災地に帰省するのだろうと思つたという。しかし、郷土芸能祭りの会場に来て非常に驚いたというのである。
バスで会ったヤンチャそうな若者たちが、それぞれの郷土芸能の衣装をまとい、舞っているのを発見したか

らである。人は外見で判断してはならないと強く思つたという。
被災した郷里を思い、都会から郷里に帰省し、郷土芸能を舞う。その舞で、そこに残された被災者たちと一体になる。
何という「想定外」を引き



カキ小屋



虎舞の団体

起こす若者たちだろう。こうした「想定外」なら大歓迎である。
こうした若者が存在しているうちは、被災地の復興は安泰である。
山田町で見たたかさんの若者たちのなかにもそうした都会から駆けつけた人た

ちもいるのだろうと思いがら、祭りを見た。
*
祭り会場に隣接する岸壁には、大型の「しゅんせつ船」が係留されていた。



写真でお伝えする
東北の風景
「釜石まつり 2024」
写真撮影 尾崎匠

